

2025.11.09.

「五千人の共食」

旧約 詩編 145編10～16節

新約 ヨハネによる福音書 6章1～15節

1. はじめに

今朝与えられております御言葉は、「5千人の給食」あるいは「5千人の共食」と呼ばれるイエス様が為された驚くべき奇跡、ヨハネによる福音書では「しるし」と呼んでいます、その出来事を記しています。今5千人と申し上げましたが、これは成人男性の数だけです。当時のユダヤ人の人数の数は、成人男子の数しか入れていなかったからです。それでいくと今日の礼拝出席は、〇人となってしまいます。しかし、実際にはこの時には女性も子どももいたはずですから、全体では1万を優に超え、2万人くらいいたかも知れません。その人達が5つのパンと2匹の魚で満腹になったという出来事です。

この出来事は、イエス様の十字架と復活の出来事を除けば、四つの福音書全てに記されているただ一つの奇跡です。どうして、この奇跡だけが全ての福音書に記されているのか？それは、この出来事が弟子たちに圧倒的に強烈な印象を与えた出来事だったからでしょう。イエス様は、様々な奇跡をされました。ヨハネによる福音書には、今まで読み進めてきた中でも、カナの婚礼で水を葡萄酒に変える（2章）ということがありまして、同じくカナで役人の息子を遠くから言葉だけで癒やされる（4章）ということがあり、エルサレムのベトサダの池で38年間病であった人を人をいやされる（5章）という奇跡が為されました。ヨハネによる福音書においてはこの5千人の共食の出来事が4つ目の「しるし」となります。イエス様はこのほかにも様々な奇跡をされたでしょうが、ヨハネによる福音書はその全てを記すことはしていません。他の福音書もそうですが、大切なことはイエス様が誰であるかということをはっきり示すことが福音書の目的だったからです。その意図に沿って、この5千人の共食の出来事を省くことは出来なかった。それは、この出来事がはっきりイエス様が誰であるかということを示している出来事だったからです。

しかし、この5千人の共食の出来事は、その記し方においては4つの福音書はそれぞれ少しずつ違いがあります。今朝はヨハネによる福音書の御言葉を受けますので、ヨハネによる福音書ならではのメッセージも受け止めながら順に見ていきましょう。

2. しるしを見たから

さて、この出来事が起きたのはガリラヤ湖、この言い方の方が私共にはなじみ深いですが、この福音書が書かれた当時は皇帝の名にちなんだティベリアス湖と呼ばれていました。この湖の向こう岸、つまり東側のベトサイダの近くの山、と言っても丘と言って良いようなところでした。イエス様が活動されていた中心は、カファルナウムといったガリラヤ湖の北の西側だったからです。イエ

ス様が湖を渡られると、大勢の群衆がイエス様の後を追って来ました。どうしてでしょうか？ヨハネによる福音書は「**イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。**」（2節）と告げます。この福音書に記されている癒やしの御業としての「しるし」は、ここまでのところでは、先ほど申し上げました4章と5章に印されている「カナで役人の息子を遠くから言葉だけで癒したこと」と「エルサレムのベトサダの池で38年間病であった人を人をいやされたこと」だけですけど、他の福音書などを見るならば、きっと他にも癒やしの業を為されていたのでしょう。この時イエス様を追ってきた群衆の数は、女性や子どもを加えるならば優に一万人を超えていたでしょうから、イエス様の評判は大変なものであったと考えられます。この人達は「また不思議な業を見られるかもしれない。」「もっとすごい奇跡を見ることが出来るかもしれない。」といった野次馬根性で集まってきた人も多かった。これだけ多くの人が動くというのは、ブームと言いますか、人気と言いますか、大変な評判が立っていたということでしょう。しかも、当時の人口は今と比べることが出来ないほど少なかったわけですから、これはとんでもない人数です。今で言えば、大谷翔平選手と山本由伸選手が宮崎に来るとなれば、このくらい集まるかもしれません。いずれにせよ、ヨハネによる福音書はここ集まった人たちに対して、はっきりとイエス様に対しての信仰を持った人たちだったとは記していません。どちらかと言えば否定的に記しています。イエス様はこの「しるし」を、ここに集まった人々の信仰に答えて為さったわけではありません。これは重大なことです。私共は、イエス様・神様が大きな奇跡をもって私共に臨んでくださるのは、私共の信仰に答えて、私共の信仰的な熱心に答えてくださるからだと考えがちです。しかし、ヨハネによる福音書は「そうではない」と告げているわけです。

3. 弟子たちの現実

この時、イエス様はこの群衆に食べ物を与えようとされました。どうしてそう思われたのか？他の福音書では「夕方になり」「彼らを深く憐れみ」（マタイ 14:14）、イエス様はこの出来事を起こされたと記されています。しかし、ここにはそのような言葉は記されておられません。ですから、イエス様は御心の中で自由にそのようにされることをお決めになった、としか言いようがありません。この福音書が告げたいのはそこではありません。イエス様の弟子たちは、この人たちを食べさせるには膨大なパンが必要であり、そんなことは出来るはずがないと考えていたということです。しかし、イエス様はそうにはお考えになっていなかったということです。このギャップに目を留めることが重要です。

イエス様は弟子のフィリポに「**この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか**」と尋ねます。このように尋ねられたフィリポは「**めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう**」と答えました。200 デナリオンというのは、1 デナリオンが当時の労働者の一日の賃金ですから、200 日分の労賃といすうことになります。これを現在のお金に換算しますと、一日1万円としますと200万円です。二万人で割れば一人100円、1万5千人で

割れば133円、パンが1個買えるかどうかですが、中々良い線いっている数字です。フィリポは現実的なお金の計算が出来る人だったようです。しかし、この現実的な計算は、まったく現実的ではありませんでした。なぜなら、1万五千個あるいは2万個のパンを手に入れることなど出来るはずがなかったからです。現在の宮崎市でもすぐに揃えることなど出来ないでしょう。ローソンに行き、その店にあるパンやおにぎりを買って占めても100個か200個でしょう。百軒の店に行き買い占めなければなりません。そんなところが、ガリラヤ湖畔にあるはずありません。ですからフィリポの答えは「どこで買い求めれば良いのかと言われましても、そんなところはありません。この人達にパンを食べさせることなど出来ません。」ということでした。更に言えば、フィリポが言いたかったのは、「イエス様、200デナリオンもかかります。私たちにそんなお金はありません。」ということだったのかもしれませんが。

するともう一人の弟子のアンデレが「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」と告げました。大麦のパン5つ。これは直径12.3センチ程度のカレー屋さんのナンを思い浮かべていただくとよいでしょう。2匹の魚というのは、小魚の干したものでメザシのようなものをイメージしていただくとよいでしょう。これは当時のお弁当ですね。一人で食べるには十分ですが、こんなに大勢の人には、何の役にも立たない。当たり前のことです。

この弟子たちのものの見方、現状把握の仕方は、信仰を抜きにした私共とまったく同じです。そして、答えは「出来ません」です。

4. イエス様の現実

しかし、イエス様が為そうとしていたことは全く違っていました。イエス様はこの5つのパンと2匹の魚でこの人達を満腹にするということでした。そして、実際11節にありますように「イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。」のです。そして、彼らは「満腹した」(12節)のです。

皆さんはこの出来事をどう受け取るでしょうか？正直なところ、私はずいぶん長い間、ここ何が起きたのか、さっぱり分かりませんでした。イメージすることさえ出来ませんでした。イエス様が為された奇跡の中で、この出来事だけがイメージすることさえ出なかったのです。13節を見ますと「人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。」とあります。パンくずの方が、最初の5つのパンより多いことは明らかです。ということは、パンは増えたということです。そんなバカなと思います。これは、弟子たちがパンを配ったのでしょうけれど、12弟子に5つのパンを配ったら半分にもなりません。ところが、みんなが満腹したというのですから、配っても配っても、パンが後から後から沸いてきたということでしょう。イメージ出来ますか？これは「質量保存の法則」に反するわけです。これはないだろうと思っておりました。すると、いよいよ何が起きたのかイメージ出来ないわけです。しかし、今は違います。このあり得

ないことを信じています。三次元世界にあるものは全てこの法則から逃れることが出来ない「質量保存の法則」さえも、イエス様は超えられたお方なのだ、だから天地を造られた神様の御子なのだ。そのことを示しているのが、この「しるし」なのだと受け取るようになりました。4つの福音書の全てにおいてこの出来事が記されているというのは、弟子たちにとってこの出来事が他の様々な奇跡よりも、一層深く、強烈に、イエス様というお方の力に触れ、イエス様というお方が誰であるかということを知らされたからなのでしょう。パンを配っても、配ってもなくなる。それは驚きと喜びに満ちた経験であったに違いありません。勿論、弟子たちは自分たちにこのような力が備わったと誤解したわけではしありません。この時弟子たちは、イエス様の力を、パンを配り続けるその手に感じ続けました。何年たっても、その時の驚きと喜びと手の感触を忘れることはなかったのでしょう。

5. 私共の理解の外におられるイエス様

ヨハネによる福音書は、他の福音書が告げていない、5つのパンと2匹の魚を持っていたのが少年であったということを告げています（9節）。それで、少年が自分のお弁当を出したので、周りの大人も恥ずかしくなって、自分の持ってきたパンをみんなが出して、それでみんなが食べられたというように理解する人がいます。しかし、私はそのようには理解しません。何故なら、そのように理解するならばここで起きたことは、イエス様によって人々の善意が刺激されて、みんなが自分の持っているものを差し出して、その結果みんなが満腹したということになります。とすれば、イエス様はそのように人間の善意を引き出す、その点において力ある方なのだということになります。また、この理解は、「だから、私たちも互いに献げ合って、助け合って生きましょう」という教えも受け取れます。まことに合理的な理解の仕方です。これならば、質量保存の法則に反することはありません。しかし、それがここで聖書が告げようとしていることなのか、それがイエス様が神の御子である「しるし」なのかと考えますと、やはり私にはしっくりしません。これは私共の合理的な理性の中にイエス様を、また聖書を閉じ込めているのではないか。私共が聖書を読む、神様・イエス様と向き合うということはそういうことではなくて、私共の中にある信仰無しの理解の仕方、ものの考え方、常識の確かさというものが砕かれ、本当に確かな方は神様・イエス様なのだという所に立たされるということだと思うのです。

私共はフィリポやアンデレの様に、全能の力をお持ちであるイエス様が共にいてくださることを考えず、いつもこれが現実的な筋道だと考えます。そのような考え方が無意味だというのではありません。しかし、私共と共にいてくださっているイエス様は、私共が確かだと考えている現実や将来への見通しというものに対して、「それが全てではない。私がいる。私に委ねなさい。私が事を起こす。」そう告げられます。私共が絶対に確かだと考えている物理法則ですら、イエス様を限定し、拘束することは出来ません。イエス様は、全く自由に事を起こしてくださいます。自分のような不信仰な者のために、イエス様は事を起こしてくださるのだろうかと考えてはなりません。良い

ですか、皆さん。イエス様はそんなことに囚われることなく、自由に事を起こしてくださいます。私共はそのようなイエス様を信頼して良いのです。

6. 過越祭との関係

次に、この5千人の共食の出来事において、他の福音書と違う二つのことに注目したいと思います。一つは4節にあります「**過越祭が近づいていた**」という時期の指定です。そして、もう一つは11節のパンを配る前にイエス様が「**感謝の祈りを唱えた**」というところです。他の福音書では、過越の祭への言及はありませんし、「感謝の祈りを唱え」ではなくマタイもマルコもルカも「**賛美の祈りを唱え**」となっています。「感謝の祈り」か「賛美の祈り」か、どちらでもそんなに違いはないではないかと思われるかもしれませんが、しかし、ここには重大な示唆が隠されています。少しややこしい話なりますので、よく聞いてください。ルカによる福音書では、最後の晩餐、つまり過越の食事においてイエス様が献げられたのは「感謝の祈り」でした。そしてマタイとマルコにおいては、最後の晩餐において捧げられた祈りはパンは「賛美の祈り」で葡萄酒は「感謝の祈り」でした。ヨハネによる福音書には最後の晩餐の時に聖餐制定の記事がありません。しかし、ヨハネによる福音書はこの5千人の共食の出来事を、聖餐へと繋がっていく出来事と理解しているということです。この6章にはそれを示す言葉がたくさんあります。22節以下の所で5千人の共食の出来事を振り返って、イエス様は「**私が命のパンである**」(6:35)と告げられましたし、「**わたしは天から下ってきた生きたパンである**」(6:51)と告げ、更に「**わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を復活させる。**」(6:54)と告げられました。これらのイエス様の言葉が聖餐を指し示していることは明らかです。つまり、ヨハネによる福音書は、聖餐の起源を他の福音書が記しているように最後の晩餐にだけ求めるのではなく、この5千人の共食の出来事もそうだし、イエス様の存在そのものが聖餐における命の祝福を示している。そう告げているわけです。五つのパンと二匹の魚でおびたしい人たちが養われたあの奇跡、質量保存の法則さえもものともせず人々を養われたイエス様が、今、聖餐をもって私共を養ってくださり、私共と共に歩んでくださっていることを明らかにしてくださっている。

わたしは、変な言い方かもしれませんが、聖餐が大好きなんです。良く最後の食事は何がいいかというような質問をする方がおりますが、皆さんはそう尋ねられたら何を考えるでしょう。わたしは聖餐と答えます。もう脈も弱くなり、何も飲んだり食べたりすることが出来なくなったとき、私は聖餐に与りたい。キリストの命に与りたい。そして、イエス様が私と共にいてくださることを受け止めて、この地上の生涯を閉じたいと思うのです。

7. イエス様はこの世の王ではない

最後にもう一つだけお話しします。今朝与えられている御言葉の最後です。「**6:14 そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。**

6:15 イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。」とあります。5千人の共食の奇跡を目の当たりにして、人々はイエス様を預言者だと言い、自分たちの王にしようと思いました。しかし、イエス様はそうのように王様として担がれることを拒み、山に退かれたのです。どうしてでしょうか？人々がイエス様を預言者と言い、王様に担ごうとしたのは分かります。これだけの力ある方ならば、当時世界最強と言われたローマ軍にだって勝てる。しかも、もう食べることに困ることはない。5つのパンと2匹の魚でこれだけの人を満腹にすることが出来るのだから、生活の心配はなくなる。こんな素晴らしい王様はいない。これぞ神様が私たちに与えてくれた預言者であり、自分たちの王様に相応しいと考えたのでしょう。しかし、イエス様はそれを拒みました。それは、イエス様が本当に与えようとされたのは、肉体の命を支えるためのパンではなく、神様の赦しを受けて、神様と共に永遠に生きる命を与えるために来られたからです。しかし、人々が求めたのは目の前のパンでした。それはいつの時代でも同じでしょう。確かに、人々の為に政治家達が確保し、与えようとするのは安全・安心な生活ということでしょう。それはこの世の国の王がすることです。この世の王の役割も大切なことです。しかし、イエス様が神様に遣わされて私共に与えようとされたのは、それではありません。罪の赦し・体のよみがえり・永遠の命という救いです。イエス様は確かに王でありますけれど、それはこの世の国の王ではなく、神の国の王です。力の王ではなく、平和の王です。しかし、そのことを人々が理解することはありませんでした。ですから、イエス様は山に退かれたのです。

私共がこの宮崎の地に住む人々に提供出来るものも、それと同じです。私共に金や銀はありません。ただあるのは、イエス様の名によって与えられる救いです。それは、この世のどんな権力者にも、どんなに富を持っている者にも、どんな立派な会社にも与えるとは出来ませんし、与えることが許されていないものです。イエス様の御名によって与えられる救い、そこに一人でも多くの方々を招いていく。そのために、私共はまだイエス様を知らない人たちよりも、ほんの少しだけ早く救いに与りました。この恵みに生ききるために、今週も遣わされている場において、神様の子・僕として、為すべき努めに励んでまいりたいと思うのです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

今朝もイエス様の5千人の共食の出来事を通して、御言葉を与えてくださり感謝します。あなたは全てのものをお造りになり、その御手の中に私共を生かしてくださり、全ての必要を満たし、何よりもイエス様によって私共に与えてくださいました救いの恵みに与らせてくださいました。ありがとうございます。どうか、イエス様が共にいてくださることをしっかり受け止め、聖餐に与り、御国への歩みをいよいよ確かにしていくことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン